社是「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」

―私益と公益の矛盾なき一致―

進化する　にっぽんぶらんど　日本力

小松電機産業

小松　昭夫社長に聞く

小松電機産業は神さまの国、出雲で生まれたベンチャー企業。率いる小松昭夫社長もまた、世間一般の起業家という枠にはまらない人。企業経営者というより、哲学・思想家といった方が適切かも知れない。その強烈な個性から生まれる語録は難解だが、どこか新鮮。「競争と共生の両立」「企業から事業へ」「長期的・多面的・根源的」「中庸の生き方」「酸化から還元そして覚醒・蘇生循環脳へ」―など。次々と飛び出す。それでも発するメッセージは不変。常に視点はアルキメデスの多面体に挑戦するように無限の球に近い。一方で〝社長業〟は「今年創業30年だが、この間一度も赤字をだしたことはない。無借金経営、金もうけもうまい」と笑い飛ばす。これからは「環境・健康・平和」「災い転じて福となす」をキーワードに、中海・宍道湖圏が北東アジアで大きな役割を担う時代が来た、と説く小松社長を訪ねた。

（聞き手　正伝盛豪・広島総局長）

小松電機産業　社長　小松　昭夫氏

高速開閉シートシャッター

防塵・防虫性で新市場創出

―小松経営の本質は市場創造によって本来あるべき社会へ変革を促すということです。この思想は中小企業研究センター賞、ニュービジネス大賞など、さまざまな表彰につながっています。

小松　人間・自然・科学の三方から場を整える21世紀の帝王学（木鶏学）、本来あるべき姿に誘導する宰相学（リーダー学…矛盾すると思われることの両立）の気運を高め、時流、地の利を学び、順序を踏んでタイミングを計る中から天の時を会得、和の生まれる瞬間をつくる。これから「どうなるか」ではなく「何のために何を目指し、いつ何をどうするか」が命。この「するか」が市場・社会を動かす。結果として、偏狭の地、島根県八束郡八雲村でのシートシャッター『門番』の誕生と発展の軌跡は還暦以降、激動の時代にあって、これから必要とされる役割を担うための、頭脳と立場を創る過程であったと認識している。

高速で開閉するビニール製シートシャッター『門番』は、もともと山陰の厳しい気候風土から労働環境を守ろうと製品化したものだが、最近はさらに新しい市場を生み出している。高い防塵・防虫性が注目され、食品、印刷、薬品業界はもとよりあらゆる業界からの新規需要も多い。光の波長で昆虫を制御するオプトロン技術を使った新シリーズも順調に伸びている。国内での累計販売台数は9万台を超え業界トップの座を維持。超密閉技術や自動復帰機能など、長年の研究開発で実用化したノウハウを含め、無償技術供与した韓国をはじめ、中国にも普及が始まっている。

あらゆる業界からの新規需要も多い『門番』

上下水道制御・管理システム

ネット活用で全国展開へ

―もう一つの主力商品である『やくも水神』も、キーワードである環境と市場創造製品なのでしょうか。

小松　21世紀は水の世紀といわれる中で、日本人の生存基盤である食料自給率35％。エネルギー100％輸入という現実がある。その上、紛争の続いている朝鮮半島の対岸、人類の歴史上初めて原爆を投下された広島に中国山地を挟んで位置するこの地域は宍道湖・中海の汚染による魚介類の大量斃死が起きている。地域・日本・世界のための緊急のテーマが目の前にあるという現実と、下水道公共工事電気計装設備の受注から上下水道制御・管理システム『やくも水神』は生まれ、発展してきた。

通信システムの大革命を受け、現在ではNTTドコモと提携、信頼性を飛躍的に高めｉモード・DoPa網・インターネット技術を生かして全国展開の管理システムへと進化している。劇的な設備・管理コストの削減が実証され、すでに全国800カ所で採用されている。

さらには、富栄養化した水を資源としてとらえ、日本で初めて中断した国家プロジェクト「中海・本庄工区」の湖を生かし、96年に世界初超生命循環海洋牧場の構想を発表している。中海・宍道湖を栄養塩を貯える巨大水槽と考えれば、中国山地からの河川、日本海とつながる境水道は、新旧栄養塩を運んでくる無動力永久コンベヤー。この地方に古くから伝わる発酵文化と組み合わせ進化させれば、世界で最も緊急のテーマである食に関わる生命社会問題を解決するモデルプロジェクトとして立案できる。鳥インフルエンザの脅威が大きな社会問題となっている今、確かな第一歩が始まった、と理解している。

―「水」に関しては新しい動きもあるようですね。

小松　この地域の産・学だけでなく、武蔵工業大学の元講師稲葉宏哉先生をはじめ、国内外のたくさんの専門家の意見も聞き、「中海・宍道湖21世紀プロジェクト」を立ち上げた。水と共生していたはずの地域が、水に背を向けてきた現状を、正面から見据えようというものだ。

中海・宍道湖は日本を代表する汽水湖。富栄養化が進み、全国70％の生産高を誇った赤貝は全滅。名産のしじみ・しらうお・あまさぎの生息にも異変が起きている。水を力ずくで浄化するのではなく、湖底に堆積している汚泥の中の窒素、リンなどを珪藻類、動物性プランクトンの発生を促すことで資源化、生命の高連鎖をつくりだそうという構想だ。

太陽と風のエネルギーを有効に活用し、表流水と湖底水の流れを循環させる『耕水機』『動水車』の実用化を目指している。すでに岡山県の倉敷市で実用試験が行われており、中海・宍道湖でも早急に体制を整えたい。北東アジア国際プロジェクトとして関係者の組織化ができればそれが対岸諸国との友好関係はもとより、この地に起きている困難な社会問題の解決にもつながると確信している。

上下水道管理コストの大幅削減を実現する『やくも水神』

好評のマンホールポンプ管理システム

(財)人間自然科学研究所

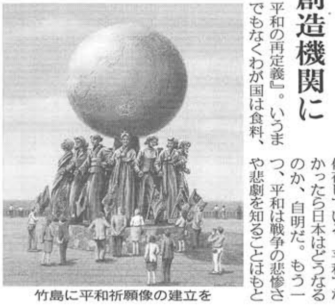
未来を拓く知価創造機関に

―ここまでの企業活動では自然環境がキーワードですが、これに国内外の社会環境も視点に置いて「健康」「平和」を加えた事業活動を標榜されています。

小松　これを私は企業から事業へ、と言っている。小松電機は私の生家の10坪の納屋を作業所に生業からスタートした。製品がヒットし受注が増え工場も大きくなって企業に成長した。〝生業〟とは家族や自分が生きるためにする労働。〝企業〟とは何かのために収益を目指す組織。その先にあるのが生涯をつらぬく目的共感集団〝事業〟。この事業とは生業や企業の繁栄はもとより社会のあらゆる立場の人たちの行動が、より望ましい社会に近づいていくような場と仕組みを生み出す仕事。第一歩は『環境・健康・平和の再定義』。いうまでもなくわが国は食料、原材料、エネルギー資源などのほとんどを外国に依存している。平和でなかったら日本はどうなるのか、自明だ。もう一つ、平和は戦争の悲惨さや悲劇を知ることはもとより、国内外の過去の戦争に至る背景、きっかけ、経緯を学ぶことから平和への道筋が見えてくるのでは。これが私の持論。日本が戦争し、加害・被害者になった近代史を国内外の視点から学習すれば本質が観えてき、今何をなすべきか分かるはず。

〝事業〟のイメージを確立、具体的な実行プランをつくるべく94年「人間自然科学研究所」を設立、昨年財団法人化した。実績を紹介すると、治山治水の偉人を発掘、書籍の発行、銅像の建立・シンポジウムなどを中心とした「一村一志運動」。鳥取県につくられた日本一の中国庭園『燕趙園』への03年10月孔子、孟子像建立（孟子像は日本で初めて）。この銅像の制作は日中国交正常化30周年を記念して、毛沢東・蒋介石両軍の国共合作で有名な日中戦争激戦地、台児荘記念館で心の昇華を祈願、郷土の治水の偉人周藤彌兵衛、清原太兵衛、両銅像と共にこの地で造った。

また、今を生きるアジア・日本・島根県人の一人として正面から取り組み96年11月、中海干拓中止、跡地活用実行プランを提案。02年1月、日韓両国で激論になっている日本海・東海、称呼問題、竹島（独島）領有権問題にも、日本海（東海）の名称を「中海」に、島根・鳥取県境の中海を「日本海」への名称入れ替えを提案。また99年『太陽の國ＩＺＵＭＯ』で発表した朝鮮戦争を人類最後の総力戦にすべく、民族衣裳をまとった戦争関係国の女性と地球をモチーフにした『人類恒久平和祈願像の建立』を提案。切手・シールの発行活動もすでに動き出している。

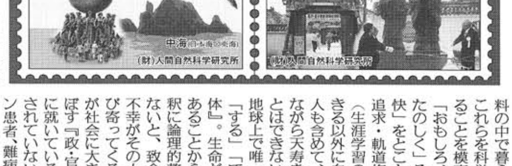


竹島に平和祈願像の建立を

また中国山東省の一流ホテルを手始めに北京オリンピックを目指して日中英訳『論語』を置くことを計画、すでに省政府への申し入れを終えている。中国、韓国での友好・昇華事業や、「健康・環境・平和」祈願施設の建設など、構想もだんだん具現化の方向に向かっている。一連のこれらの活動が評価され、03年11月孫子の故郷中国山東省東営市から『戦わずして初期の目的を達成する平和の知恵者・孫子』の銅像をいただいた。

―「人間自然科学研究所」と小松電機産業との関係はどうなのでしょう。

小松　この研究所は混沌の時代にあって、人間と自然と科学のかかわり合いの中で、未来を拓く知価創造のための機関として発足した。端的にいえば、これまで活動の柱は小松電機だったが、オーケストラに例えるなら、これからは研究所が指揮者。小松電機は事業の一つのコアになる演奏者。小松電機と並列にステージに立ち、演奏するのは「異業種協同組合テクノくびき」の加入各社および賛同諸団体個人。同じ目的を持って異なった目標、役割分担する組織・集団を目指している。さらに、小松電機の分社化などで奏者が増え、機能分担が進んでいくだろう。


HNS　竹島に平和祈願像の建立を
中海（日本海⇔東海）
（財）人間自然科学研究所
HNS　鳥取燕趙園　孔子孟子像
（財）人間自然科学研究所

持続可能な社会へのパスポート

一隅を守り千里を照らす

―だんだん哲学的になってきましたが、小松社長のいわれる『中庸』の経営とはどんなものなのでしょうか。

小松　中国古典の四書（大学・中庸・論語・孟子）の『中庸』では「偏らざるをこれ中といい、易わらざるをこれ庸という」。自分が置かれている環境を肯定し、現在に至るまでの縁のあった人とたくさんの知らない人々の支えによって現在の自分があり、自然と歴史の中に生かされていることを自覚（感謝）。人類の特性を考察する中から究極の論理的・合理的目的に目覚め、環境・健康・平和という観点から自分の一生で達成できない目標を3個以上イメージ。それに向かって節目をつくり、状況に応じて臨機応変「生かされながら生きる（生命は有限。命は無限）」と解釈している。中心から大きく外れず自立復元、すなわち『和道』。一病息災から覚醒（智恵）と蘇生（生命）の循環が起こる場で幸せを感じられる人の輪が広がることになる。

経営とはこのことの実社会での実践。「経」は道理の追求。「営」は行う場所。具体的には一つの「目的」と三つ以上の「目標」が必要。人類究極の目的「天寿をまっとうでき、人々が楽しく生きられる持続可能な社会を築くメンバーの一員と自覚できること」だ。混迷期の指導者は空間と現在・未来の時間の中に矛盾のないイメージ、ストーリーを描き、分かりやすく示さなければ、人々は今何をなすべきか見えてこない。

化学物質と工学テクノロジーによる国家間戦争の世紀が終結した。これは映画、メディアにより人類史上、例のない膨大な犠牲をだした核の破壊力の世界的認識ができ、その後、軍需技術として発達した双方向デジタル通信・衛星テレビ放送、そしてたくさんの人々の英知と努力のおかげである。その後、台頭してきた中東問題・朝鮮半島問題。そしてウイルスによるO―157、SARS。生存にとって必要不可欠な食を脅かす牛・鯉・鳥などからの脅威は、持続不可能な膨張の時代から持続可能な発展の時代への転換を人類に告げているとも考えられる。これらのことと、この地域の地政学を学ぶ中から日本そして中海・宍道湖圏に「天の時」「地の利」すなわち人類史上の大きな役割がまわってきたことが理解でき、世界大量空輸・軍需技術から開放されたインターネット・双方向映像コミュニケーションテクノロジーなどを生かせば、私が準備してきたことと相まって共感・納得・行動できる「人の和」が生まれ、新しい時代の幕開けになると確信している。

―最後に、1981年に制定された社是は「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」ですが、経営理念の「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」はユニークですね。

小松　衣食住が足りない時代につくられた『論語』の中に『学んで「知ってやる人」は「好きでやる人」にかなわない。「好きでやる人」はこれを「楽しんでやる人」にはかなわない』とある。人類は衣食住がたったあと、長年の化学物質の影響を受けた空気・水・食料の中で暮らしている。これらを科学的に克服することを模索すると共に「おもしろ、おかしく、たのしく」その上に「愉快」をとことん論理的に追求・軌道修正しながら（生涯学習の必要性）生きる以外に自分と周りの人も含めて、幸せを感じながら天寿を全うすることはできない。『人類は地球上で唯一つの解釈を「する」「できる」生命体』。生命が超論理的であることからすれば、解釈に論理的整合性をとらないと、致命的な病気と不幸がその人の周りに忍び寄ってくる。このことが社会に大きな影響を及ぼす『政・官・財』の要職に就いている人々に理解されていないことが、ガン患者、難病、ボケ、自殺の急増、若い人の生命力低下、少子高齢化などが重なり閉塞感から刹那主義がはびこり、未来に対するいい知れぬ不安、そして戦争につながる要因となっているのでは。

最後に、2人の先達のメッセージをお伝えしたい。

アルバート・アインシュタイン博士（1922年来日講演）

「世界は進むだけ進んでその間、幾度も闘争が繰り返され、最後に闘争に疲れるときがくるだろう。その時、世界人類の平和を求めて、世界の盟主をあげねばならぬ時が来るに違いない。その世界の盟主は武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を超越したもっとも古く、かつ、尊い土地柄でなければならぬ。世界の文化はアジアに始まって、アジアに帰り、それはアジアの高峰、日本に立ち戻らなければならぬ。われらは神に感謝する。天がわれら人類に日本という国を創っておいてくれたことを」

「世界の大統領・首相経験者でまとめられた人間の責任に関する世界宣言」第11条（1997年）

「あらゆる財産と富は、正義に則し、人類の進歩のために責任を持って使わなければならない。経済的および政治的権力は、支配の道具としてではなく、経済的正義と社会的秩序に役立つように使われなければならない」

―長時間ありがとうございました。